

人間を高めるものが文化

昭和五十九年三月、武田正浩が久しぶりに渡植にあいに来た。

兵庫教育大学へ勤めるようになって五年目になる武田は、そろそろ地元の大学に帰りたくなっていた。それで春休みの間、地元の大学関係者にあい、そのあたりの情報を仕入れるのが帰省の目的でもあった。

時間講師ならと各大学から声がかかるのだが、教授のポストは空きがない。ただ新設の県立医療短大に教育関係の科目が開設されるので、そこなら雇ってもらえそうだと武田は渡植に近況を話した。

老境にある渡植にとって、武田のように十分な話相手になる人物が戻ってくることは、個人的にはうれしいことだった。

非常勤で週一時間だけ大学にでかけ、若い学生相手に講義する生活は腹にたまったものが吐きだされず、大半が残ったままの感じがあって気分がすぐれない。教授でいたころは気のあう大学の同僚と話すこともでき、思索しているテーマや思いついたことを披露し、議論を深める相手もいた。また学生たちもよく研究室に顔をのぞかせていたから、話相手に困ることはなかった。

ところが研究室を取りあげられ、講師控室のソファで、まるでバスでも待つ乗客のように待機している状況は、さすがに学者生活の終末を覚えさせるものがあった。そもそも講師控室の利用者は少なく、渡植が行く時間に他の講師がいることはめったになかった。

それに大学は高齢を気遣い、渡植が勇退を申しでるのをいまかいまかと待っていた。それもいわば世の当然ななり行きだから、老学者は腹をたてる気はない。自分の歳で教壇に立っているのは、たぶん全国でもまれなことであろうからかれ自身、自分がこうしてわずかでも大学で働けることは有り難かった。

しかし健康に自信はあるものの、体力の衰えだけはどうしようもない。

昨春からとりかかっていた学問の社会学的考察は、まだ脱稿できずにいた。

横浜の中山も屈して度々、原稿の催促をしてくるのだがずっと待たせたままである。思考力が衰えたとは思っていない。むしろ年の功とでもいうのか、若いときに見えなかったことがみえてくる気がする。いろいろな考えも浮かぶ。それらが、なかなかまとまったものにならないのは、やはり発表の場所を断たれているからだろうか。

この年になって、出版物として商品化された論文集を書きあげようという気持ちは毛頭ないが、さりとてまた私家版の著書を世に問う考えもなかった。自分の時間のなかで、自分にあったやりかたで研究をつづけることができれば、それで本望だと自戒する。

もともと、拙いものにして自分の研究の成果が少しでも多くの人たちに理解

され、支持されるのはうれしいものだ。それはだれしも研究する者に共通の願いでもある。

しかし、渡植は自分の学問が科学技術の発達をうながす「用としての学問」ではなく、「用を排する学問」であることを承知していた。日本では学問をその「成果」の面で見ると強すぎ、「用としての学問」の危険な独走を許してしまっている。「用を排する学問」が対等に存在してこそ、社会の健全な発達があるのではないか。

一流の学者でもない自分がこのようなことを書き、論じたら不遜の仕業として嗤^{わら}われるのかもしれないが、そのような風潮こそ糾すべきであろう。

思えば、日本の学問の伝統は学問の看板をかかげているものだけが学問をしているのではなかった。農山村や下町で暮らす人々の生活の中に、民衆の知恵としての学問があったのである。明治以来、翻訳文化を無反省に受け入れたために、これらの民衆の学問をこわしてしまったのだ。

渡植はここ最近このようなことを考えていたから、武田が医療技術の短大に勤めることには賛成だった。理科系の大学だったならなおのこと、専門的な知識や技術から離れて、人間や社会について学ぶべきであろう。武田なら看護師をめざす学生たちに、広い視野から柔軟に物事をみていくことの大切さを教えていくことだろう。

ところで、と武田が話題を変えた。

一年前の正月に、朝日新聞の書評を渡植から紹介され、内山節の『労働の哲学』を読んだがこれがなかなかおもしろかった。それで内山が書いた他の本も読もうとしたが、内山の処女作である『労働過程論ノート』だけが絶版になっていた。大学の図書館にもおいてないというので、すでに読んだ他の三つの著作の感想を内山に書き、そのついでに絶版になっている『労働過程論ノート』をぜひ読みたいのだが、入手する方法はないだろうかときいてみた。



するとしばらくして、内山から丁重な内容の手紙と望みの本が届いた。それも自分の手持ちの一冊だが、それほど所望されるのなら是非もないので贈呈したいと書いてあった。武田はひどく恐縮し、内山の処女作を熟読し礼状をだした。ちょうど一年前の春過ぎの話である。

武田は夏に暑中見舞いをかねて、自分が書いた論文を数編、内山へ送った。返事を待ったが音信はなかった。

大学の仕事が忙しくなり、内山のことも忘れかけていた年のくれ、東京の三一書房から武田宛てに書籍が届いた。内山の最新作『フランスへのエッセー』

だった。年明けの賀状に、東京にいるのは半年ほどで、あとは群馬の山奥で畑を耕しているか、旅に出ている生活ですと添え書きしてあった。さらに今後、自分が出す本はすべて、出版社から直接武田へ贈呈するようにしましたとあった。

思いもかけない厚遇に武田は驚き、内山の友情にどのように応えるか思案した。

そして武田がふと思いついたのは、渡植のことだった。渡植の論文だったら内山は関心をもつかもしいない。そう判断した武田は、手元にあった渡植の論文の抜き刷りを内山へ送った。その多くは渡植が私家版に収めたものだったが、それ以前に書いたものもいくらかあった。武田にしてみれば渡植の学問の基調に流れている明治生まれの学者の頑固な文化意識を、若い内山がおもしろく受けとめてくれればそれで論文の送り甲斐がある。そんな気持ちだった。

渡植には思いがけない話だった。

渡植は愛用している茶道具を取りだし、茶をたてると、武田にすすめた。そして武田が飲みおわると、論文を内山へ送ったことについて丁重に礼をいった。

本来なら自分がすべきことを、武田がかわってやってくれたのである。

内山と自分は年の違いこそあれ、思想的に同じ基盤に立っている。

内山の著作を何度も読み返し、渡植は日毎この思いを強くしていた。かれはかつて、左右田や本多に対して自分ではとてもかなわないものを感じたことがある。そしていま内山のものを読み、再びそのような思いを味わっていたのだ。

できるものならかつて本多と語りあったように、内山と意見を交わしてみたい。

ずっと逡巡していた老学者にとって、武田の話は願ってもないことだった。

いずれにしろ武田が送った論文について筆者として、一筆書く必要があった。

渡植はその夜、内山へ長い手紙を書き、武田から送った論文について、一読頂ければありがたいと率直な気持ちを伝えた。

内山からは何の返信もなく、夏が過ぎ秋になった。

渡植は学問の社会学的な考察を試みた論文をやっと書きあげ、中山のもとへ送った。原稿用紙にして六十枚になった。

かれはこの論文において、人間の生活のなかにいきて人間を高めるものこそ文化であり、本来の学問はこうした意味の文化に資するものでなければならない。「用としての学問」は、科学技術の発展に寄与したが、そのことが生活文化



の向上につながったとはいえない。生活文化と結びついた『行為』としての学問」こそもっと尊重され、みなおされるべきであろう、とこのような学問論を展開した。十二月になって、中山がワープロで活字に仕上げた恩師の原稿をもって松山へやって来た。

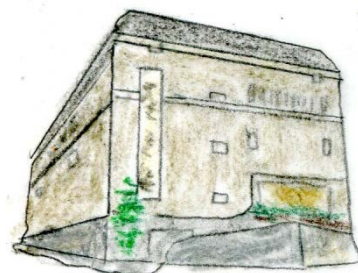
中山は毎年、学校時代の友人三人とつれ立ち松山詣でと称し、夏に恩師を訪ねるのが恒例となっていたが、いつもの友人の都合が悪く初めて初冬の松山詣でとなった。

夫妻で権現の温泉宿に一泊し朝方、自宅へ伺うと渡植夫妻もでかける仕度をして中山を待っていた。

バスと路面電車を乗りついで、四人がでかけたのは道後公園の一角に三年前に開館した「子規記念博物館」だった。俳句をたしなむ香誉子夫人が、中山ひとりならともかく今回は奥さんも一緒だから、こういうところもよいだらうと案内することになったのである。

朝からよく晴れて、初冬にしては暖かな日だった。公園に建てられた句碑をみて歩いたあと博物館に入った。

説明をかってでたのは渡植で、漱石の松山下りのいきさつや子規との交遊、さらには子規の晩年の闘病生活にまで話が広がる。しかし自分だけが話しっぱなしになるのではなく、要所要所で傍らの香誉子に事実関係について確認するといった様子である。



中山は恩師の博識には驚かないが、渡植が家庭のなかではあまり見せない細やかな気配りを香誉子夫人にするのを見て、先生もずいぶん変わったものだひとりごちていた。

横浜商業専門学校のと看、教師になりたいという中山にそれでは東京文理科大学に進学して教育について勉強し、それから教師になればよいと諭したのは渡植であった。

中山は心理学と論理学の本を一冊ずつ渡され、わからなければいつでも質問にくるようにいわれた。当時、朝鮮帰りの渡植は生徒課長だった。学生たちにとってこわい存在である。ところが渡植の修身の授業は、何かにつけて朝鮮のことを取りあげる。日本に住む朝鮮人の劣悪な暮らしを知っている学生たちには、朝鮮の文化や民族をほめる渡植が奇異に映った。生徒課長はほどなく、朝鮮カルチャーというあだ名をつけられた。

その渡植の指導は徹底していた。

中山に英語力がないとわかった、夏休みに職員室で中山ひとり特訓であった。

一年間、受験のための指導を特別に受け、昭和十八年の夏、中山はめざす大学へ合格できた。

ところが学徒動員の繰りあげ卒業で、学友たちがみんな軍人の道へ行くことに中山は悩んだ。渡植に苦しい胸の内を話すと、生き残って仕事をするのも国のためになることだし、むしろその方が苦勞が多いと愛弟子を諭した。

その年の十月に、中山は渡植につれられて神田へ行き書物の見方や買い方を教わり、帰りに入学祝の角帽を買ってもらった。

さらに大学に入ると、ドイツ語がわからない。家に来いというので、毎晩のようにでかけてドイツ語を教わった。夫人の善は女学校で教えていたから、家事は長女の紗江子に任されていた。中山は夕食を渡植家ですますことが多くなり、しだいに夫婦の間が決してうまくいっていないことに気づくようになった。中山がふりかえって思うに、聡明でむやみにかしづくタイプでない善は、君主のように振る舞う夫のあつかいに気疲れしていたのではないだろうか。

その恩師は再婚してかわった。

「京マチ子のような美人で、江利チエミのような賢い人がいい」

昭和三十四年、再び中山のすぐ近くにすむようになった渡植は再婚相手についてこんな注文をつけた。ちょうどそのころ中山の友人に灰野という高校の音楽教師がおり、かれの家に間借りし按摩と鍼灸の仕事をして暮らしている女性がいた。

名前を石丸香誉子といい、大正二年生まれの四十六歳だった。彼女は京マチ子ほどの美人ではないが、なかなか頭の良い人だと評判だった。



京 マチ子

中山が詳しいことを灰野に質すと、かれは隠すこともなくつぎのように話した。石丸香誉子は、松山の権現という村の素封家の娘だった。香誉子が市内の県立女学校へ通うというので、住んでいた屋敷を解体し、女学校の近くへ牛車で運び、そっくりに再建した。香誉子は上野の音楽学校をめざしてピアノを習っていた。街中の石丸家には、自然と音楽好きな若者が集まるようになった。

その中に津守という青年がいて、香誉子と恋仲になった。津守が京都帝大の三年のときに、女学校を卒えた香誉子は京都へ行き、同棲を始めた。その後、二人は正式に結婚し、子供も二人できた。津守は戦時中、川崎中学の教師をしておりそこで音楽を教えていた灰野と知りあい、家族ぐるみで交際する仲になった。

戦後、津守一家は津守の伯父の屋敷に身をよせていた。伯父は財界の有力者で、大森に屋敷があった。津守は戦後、朝日新聞社に勤めていたが伯父の屋敷

で開かれる短歌の会に顔をだして、元侯爵家の未亡人と親しくなった。放っておけば燃えあがるばかりだと判断した香誉子は、一家で目黒の方へ引っ越した。それで津守と未亡人の仲は切れたかに思えた。

ところがである。未亡人が転居先に突然現れて、決着をつけたいと香誉子に迫ったのである。津守を間にして女二人の争いになった。激情した未亡人は、煮え切らない津守に襲いかかった。とっさに背後から未亡人をはがいじめにした香誉子は、その途端にふっと身体の力がぬけおち、畳にへたりこんでしまった。未亡人の豊かな乳房にふれ、「これでは、負けだ」と香誉子は悟ったのだった。

そのときの感触を香誉子は親しい人によく話す。「ムチムチだった」と表現し、あっけらかんとしていた。

自分から家をでて香誉子は、進駐軍のハウス・キーパーを手始めに様々な職を転々としながら、やがて鍼灸師の資格をとって、那須でなんとか食べていた。横浜の灰野のところへ間借りするようになったのはまだ半年前のことで、目的の一つは鍼灸の勉強だった。

中山は灰野から聞いたことをそっくり渡植に伝えた。すると、意外にも恩師は乗り気になった。

のちに、中山が紗江子から聞いた恩師の口説き文句はこうだった。

「あなたが家をでて津守は得をしました。わたしがあなたにお返しします」

中山は紗江子から、父がはげみすぎて腎^{じん}虚になったと聞かされた。

そのころ中山が新婚家庭に行くと、この歳になってこんなものを食わされていると渡植は鯛のてんぷらを食べていた。

渡植は中山に、君は奥さんに労わりの言葉をかけているかねと尋く。思いがけない問いかけに中山が目を白黒していると、一日に三回は愛していると云えと新妻から強要され、これにはまいつていると満更でもない様子であった。

博物館をみて、再び公園の道を散策しながら中山は本当によい人を紹介したものだと思った。前に行く渡植が、「ママや」と傍らの夫人に声をかけているのが聞こえ、そのとき中山は渡植夫妻が、ちょうど銀婚式を迎えていることに気づいたのだった。

